

年間テーマ：上杉家歴代の文書管理と歴史編纂

期間テーマ：斉憲と幕末の動乱 12月26日（火）～1月28日（日）

資料名	頁数	法量 (cm)	時代	番号	所蔵
複製 国宝上杉本洛中洛外図屏風	六曲一双	各160.4×365.2	原本 室町～桃山時代 (16世紀)		上杉博物館
国宝 上杉家文書 (赤筆笥坤第五抽斗) 1 徳川家茂暇参内達書写	1通	16.1×34.0	(文久3年・1863) 6月2日	1308	上杉博物館
国宝 上杉家文書 (赤筆笥坤第五抽斗) 2 徳川家茂暇参内達書写	1通	16.4×68.5	(文久3年・1863) 6月	1309	上杉博物館
国宝 上杉家文書 (赤筆笥坤第五抽斗) 3 徳川家茂暇参内先立聞繕書	1通	16.2×30.4	(文久3年・1863)	1311	上杉博物館
上杉文書 4 「御上洛量帳」	5冊	29.5×18.4	江戸時代 (1860年代)	270	上杉博物館

上杉文華館では、国宝上杉本洛中洛外図屏風とともに、「上杉家文書」を毎月入れ替えながら常時展示しています。上杉家文書は、江戸時代以降に行われた文書の管理や歴史編纂を通じて、中世以来の上杉家の由緒や権威、特定の当主の事績を示す文書が収集、選別され、移動や変化を続けながら、現在の構成（2018通、4帖、26冊、保存容器として両掛入文書箱、精撰古案両掛入文書箱、黒塗掛硯箱、赤筆笥 乾・坤2棹、附として歴代年譜325冊）になったことが明らかになっています。

また、「上杉家文書」とは別に「上杉文書」と呼ばれる藩政文書を中心とした1万点弱の史料群があり、米沢市では令和3年度から文化庁の「地域活性化のための特色ある文化財調査・活用事業」の補助を受け、調査に取り組んでいます。その中核は文書管理や歴史編纂を担った、江戸時代の御記録方や、近代の上杉家記録編纂所総裁伊佐早謙の関連文書です。上杉文書には、国宝「上杉家文書」を深く理解するための手がかりが、豊富に含まれています。

今年度は本調査事業の成果を活用して2つの史料群を紐解きながら、江戸時代から近代にかけて、文書の具体的な管理方法と歴史や記録の編纂事業、その背景にある藩政の状況や世情をご紹介します。永年にわたり文書を守り伝え、活用してきた人々の営為にご注目下さい。

〔斉憲と幕末の動乱〕

文久3年（1863）、12代藩主上杉斉憲は將軍徳川家茂に供奉するため、京都に登ります。藩主の上洛は2代藩主定勝以来、約230年ぶりの一大事であり、これを契機に米沢藩は全国的な政局に深くかかわっていきます。当時の京都は、開港を進める幕府と攘夷を求める朝廷が対立する中で、公家と有力諸藩の思惑が交差し、脱藩浪士が暗躍する混乱のさなかにありました。同年6月、家茂は暇乞いのため御所に参内し（資料1～3）、江戸に戻ります。一方、斉憲は帰国を許可されず、攘夷断行や横浜鎖港といった難題が山積するなか、岡山藩や阿波藩といった諸藩と協力し、幕府と朝廷間の調整に尽くしました。斉憲と1100名以上の米沢藩士は、9月18日になってようやく帰国を許可されました。

国宝「上杉家文書」には、文久3年の文書が30点伝来しますが、幕府や朝廷、他藩との交渉の内実を示すような書状類は見られず、御所への参内関係が半数を占めています。朝廷からの沙汰書、行列図や儀式の次第だけでなく、宿割や当日の衣装の具体的な指示（資料1）といった軽微な文書も含まれる点が特徴的です。これは文久の上洛が当時から重大事であったことに加え、斉憲の参内を勤皇の事績として顕彰するため、明治中期以降になって特別に選別、保管された可能性が考えられます。